

創刊号70冊に見る昭和21年の出版状況

A New Epoch in Publishing in the 70magazine's First Issue in the Year Showa 21

田 中 薫

2001(平成13)年度宮崎学術振興財団の助成による研究報告として私は2002(平成14)年4月、『宮崎公立大学716田中薫研究室所蔵雑誌創刊号目録—創刊号に見る戦後日本の雑誌』と題する報告書をまとめた。これは、私の研究室に所蔵されている約370冊の創刊号を、学生をはじめ多くの人々が有機的に活用できるようにするため、その目録を作成したものである。そして、その中に1946(昭和21)年のものが70冊含まれていることがわかった。

第二次大戦の終戦は1945(昭和20)年8月15日。それから12月までの約4か月間はまだ日本中が混乱のさなかにあり、この時期に創刊された雑誌はきわめて少ない。しかし、翌昭和21年になると激増する。そうした混乱と新しい時代の夜明けともいえるべき、この時代の出版界の状況を、この70冊の手持ちの資料を分析することで、どのような時代状況にあったかをあきらかにしてみたいと考えた。

これらの雑誌は、基本的なスタイルは雑誌の形式(条件)を備えてはいるものの、あらゆる物的な面で、現在のものとは大きく異なっている。紙も、印刷も、製本も、その背景にある国の事情も。あれから約60年、すでに21世紀を迎え、日本の国力も、経済力も、社会的な事象も、風景、風土までが大きく変わった。それに伴って、出版状況も大きく変っている。

しかし、そこには今日の繁栄につながる原点となった時代の姿がある。そこでその状況比較を試み、これらの70冊の資料分析から読み取れることを確認してみたい。

キーワード：創刊号、昭和21年、雑誌と書籍、出版・用紙・印刷事情

目 次

- | | |
|------------------------|--------------------|
| I はじめに | V 70冊の創刊号から読み取れること |
| II 70冊の創刊号が出版された時代の背景 | VI わかったこと |
| III 70冊の資料を分析する | VII おわりに |
| IV 昭和21年はどのような時代であったのか | |

I はじめに

2002(平成14)年4月、私は宮崎市学術振興財団の助成により、『宮崎公立大学716田中薫研究室所蔵雑誌創刊号目録—創刊号に見る戦後日本の雑誌』というB5判154頁の研究報告書をまとめ、上梓した。

その主体となった資料類は、私の父が残してくれた約300冊ほどの雑誌創刊号のコレクションであった。が、その中に1946(昭和21)年のものだけが突出して多くあり、計70冊もあることに着目した。この年は、終戦の翌年である。したがってまだ、あらゆる物資は不足しており日本国中が貧しく、騒然とした世相ではあったが、しかし多くの人々は「終戦に伴って到来した新しい時代」ということで、希望に燃えていた。

終戦当時の日本の総人口は約7,580万人。財閥解体、旧勢力の崩壊、支配階級の入替えなど、さまざまな組織と概念の根本的な価値の転換が行われ、すべての分野でと言ってもよいほど多くの物事とそれまで多くの人々の手で、明治以来連綿として築き上げられてきたあらゆる秩序や思想が崩壊し、入れ代わってしまうという伏目の年であったのである。

そこで、この年が現実的にはどのような特徴を持つ時代であったかを、これらの70冊の雑誌創刊号を分析することで読み取り、さらにこれらの雑誌を、出版物の一分野という視点から捉え、見つめなおして、戦後復興の原点ともなったといえる時代の特徴を探り出し、現在の状況との比較を試みた。

そこで、これらの70冊の創刊号が、このような形で出版された頃の時代状況とは、どのようなであったのかを知るために、手元の年表から、昭和21年前後のトピックを拾いだして、当時の世相を把握してみることにした。

II 70冊の創刊号が出版された時代の背景

まず最初に、基礎資料として私が使用したのは、かなり以前からテキストとしては最もポピュラーな存在の一つであった小中学生用の史料集『要説日本史年表』(山川出版社)である。

そこに書かれている記述の中から、この頃の状況を把握するために、終戦前後の時代がどのような状態であったのかを示すトピックを抜き出して、次のように文章化してみた。

但し、煩瑣になることを避けるため、1941(昭和16)年12月8日に日本軍の真珠湾攻撃で始まった「太平洋戦争」初期の状況とその後の流れ、展開等にさかのぼって触れることは割愛した。したがって便宜的な理由だが、ここでは終戦の前年の1944(昭和19)年からの4年間の事象のみを拾いだして記述している。

・1944(昭和19)年＝首相：東条英機

1月、新防空法実施。大都市に疎開命令。2月、決戦非常措置要綱決定。

- 5月、国民総蹴起運動始まる。7月、サイパン島日本軍全滅。東条内閣総辞職。
8月、学徒勤労令。女子挺身隊勤労令施行。10月、満18才以上を兵役に編入。
11月、サイパン基地の米空軍、日本本土爆撃始まる。
- 1945（昭和20）年＝小磯国昭、4月から鈴木貫太郎、8月から東久邇宮稔彦王。
 - 1月、アメリカ軍、ルソン島に上陸。3月、硫黄島の日本軍全滅。東京大空襲始まる。
 - 4月、アメリカ軍、沖縄本島に上陸。5月、ドイツ無条件降伏。6月、大政翼賛会解散。
 - 7月26日、ポツダム宣言を発表。8月6日、広島に原子爆弾を投下。8月8日、ソ連、日本に宣戦。8月9日、長崎に原子爆弾投下。8月15日、ポツダム宣言を受諾し無条件降伏。9月2日、ミズーリ号上で降伏文書に調印。9月10日、マッカーサー元帥、日本管理方針を発表。戦犯容疑者第一次逮捕令。
 - 10月、治安維持法・思想警察等廃止。政治犯釈放。
 - 11月、日本社会党結成。総司令部、財閥解体を指令。日本自由党、日本進歩党結成。
 - 12月、日本共産党再建。総司令部、農地改革を指令。新選挙法（婦人参政権・大選挙区連記制）公布。労働組合法公布（1946年3月施行）。
 - 1946（昭和21）年、首相＝幣原喜重郎（5月まで。その後は吉田茂）
 - 1月1日、天皇自身が神の子孫であることを否定する人間宣言（神格否定の詔書）を行い、神道も国家から切り離された。公職追放令が出される。
 - 2月、第一次農地改革を実施。日本農民組合結成。金融緊急措置令（新円切替）。食料緊急措置令。3月、憲法改正草案要綱発表。4月、婦人参政権による男女平等の最初の総選挙が実施され、女性が選挙権を獲得し日本の新しい出発点となった。
 - 5月、メーデー復活（第17回）。食料問題で食料メーデーに発展。各地で「米よこせ」運動が起きた。極東国際軍事裁判（東京裁判）開廷。
 - 9月、戦前の体制を経済的に支えていたとされる三井、三菱、住友、安田などの財閥解散が決定。労働関係調整法公布（10月施行）。
 - 10月、第二次農地改革諸法（自作農創設特別措置法等）公布。それまで支配的であった地主、小作関係を改革して、小作人からは多くの自作農が生まれた。11月3日、日本国憲法公布。翌年5月3日から施行される。
 - 1947（昭和22）年、首相＝吉田茂
 - 1月、全官公労、2・1ゼネスト宣言。マッカーサー、スト中止命令。3月、日本民主党結成。
 - 4月、最初の知事・市町村長選挙。労働基準法・独占禁止法・地方自治法公布。衆参両院議員総選挙（社会党第一党）。
 - 5月、日本国憲法施行。天皇の地位は日本国ならびに日本国民統合の象徴となる。5月、第一回国会開会。

6月、片山哲内閣成立(初の社会党内閣)。日本教職員組合(日教組)が結成される。

8月、最高裁判所発足。民間貿易を制限付で許可。9月、労働省開設。キャサリン台風により
関東地方大水害。

10月、国家公務員法公布。12月、過度経済力集中排除法・炭鉱国管法公布。内務省解体。

というような流れが続いている。⁽¹⁾

この時代、ヨーロッパでは、すでに1943年にソ連軍がスターリングラードでドイツ軍を破り、反撃を開始している。その後、アメリカ、イギリスを主力とする連合軍が北アフリカからイタリアに上陸。9月、イタリアが降伏。さらに、1944年6月、連合軍は北フランスに上陸し、パリを奪還した。東西から攻め込まれたドイツは1945年5月、ベルリンを占領されて、ついに降伏。ヒトラーは自決した。

その前、1945年2月、アメリカ、イギリス、ソ連の代表は、黒海海岸のヤルタに集まって、ヤルタ協定を結び、これ以後の戦争方針を決めていた。

1945(昭和20)年3月から、沖縄がすでに戦場となっていた。その後も、米軍の攻撃は続き、沖縄の人口の4分の1にあたる12万人もの犠牲者が出たと推定されている。そうした中、1945年4月にアメリカのサンフランシスコに集まった連合国側は国際連合憲章をまとめ、同年10月から第二次大戦後の世界の平和を維持する機関として、国際連合がつくられすでに活動を開始していた。

東南アジアでは、1945年にインドネシアがオランダから独立を宣言し、4年の戦争の末独立をする。フィリピンはその後、1946年にアメリカから独立する。その翌年、インド、パキスタン、ビルマ(現在のミャンマー)もイギリスから独立を達成する。また、ベトナムは1945年に独立を宣言したがフランスと戦争となり、1954年にはいったん休戦協定が結ばれたが、南北に分割されてしまった。

その1945年7月、連合国はポツダム宣言を発表。それでもまだ戦争は続いていたが、ついに8月6日、広島に。8月9日、長崎に原爆が投下される。その間の8月8日にはソ連が日本に宣戦している。

そして、ついに8月15日にポツダム宣言を受諾、日本は降伏を決定する。天皇自らが玉音放送を行い、明治以来たどってきた富国強兵、大国への道はここに大きく変更を迫られることになったのである。

終戦後、日本の領土は北海道、本州、四国、九州とその回りの島々に限られることとなり、日本は連合軍に占領された。そして、マッカーサー元帥が最高司令官として着任し、連合国軍司令部(GHQ)が中心となって、日本の政治は数々の戦後改革が実行されていった。

その後1948(昭和23)年11月、極東軍事裁判の判決が行われ、東条元首相ら7名が絞首刑となる。だが1950(昭和25)年8月には、警察予備隊が設置される。しかしこの年、朝鮮戦争が始ま

り日本は特需景気となる。

朝鮮は日本の敗北により、植民地支配からは解放されたが北緯38度線を境に、北をソ連に、南をアメリカに占領された。

したがって、朝鮮の人々の統一への願いは、米ソ対立のために実現せず、1948年、北に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)、南に大韓民国(韓国)という2つの国がつくられた。さらに、1949年10月には中華人民共和国が成立している。

このように世界史的な大きな事象が連続し、それらを示す記述がさらに続いて行く。その後も1951(昭和26)年9月8日には、サンフランシスコ平和条約・日米安全保障条約が調印(全権吉田茂)され、ようやく日本は再び独立することになる。

このように、この程度の凝縮したトピックだけを拾いだして記述してみても、あらゆる点で、いかに劇的な変化をした時代だったかということが理解できる。

では次に田中研究室に保存されているこの時代の雑誌の中から、この昭和21年に発行された創刊号のデータを紹介しておこう。また、この目録の凡例は次のような8つの項目について記述していることを示している。

但し、本論文で対象としているのはすべて1946(昭和21)年のもののみなので、西暦と年号の部分は便宜的に割愛した。また並べている順序は発行年月日順としたが、資料番号は、この年のみの分をあらためて001から070まで付けなおしたものである。

●716研究室所蔵雑誌創刊号目録 1946(昭和21)年分・抄録

凡例:『タイトル(題号)』 ①判型(サイズ) ②第1巻第1号の発行年月日 ③発行形態 ④版元(出版社名) ⑤編集人または編集長名 ⑥定価 ⑦総頁数 ⑧版式(K=活版、CO=カラー・オフセット、MO=モノクロ・オフセット、CG=カラー・グラビア、MG=モノクロ・グラビア、表=表紙の版式+色数)

- 001 『世界』 ①A5 ②1月号 ③月刊 ④岩波書店 ⑤吉野源三郎 ⑥4圓 ⑦192p ⑧K、表O2色
- 002 『宗教と文化』 ①B5 ②1月号 ③月刊 ④宗教と文化社 ⑤佐伯儉 ⑥60銭 ⑦16p ⑧K、表K1色
- 003 『家庭エホン』 ①B6 ②1月号 ③月刊 ④博文館 ⑤大橋進一 ⑥1圓20銭 ⑦16p 表紙共 ⑧O4色、表紙O4色
- 004 『新農藝』 ①B6 ②1月新年号 ③月刊 ④河出書房 ⑤竹泉武 ⑥1圓20銭 ⑦64p ⑧K、表O4色
- 005 『太陽』 ①B6 ②1月7日発行 ③月刊 ④太陽社 ⑤古瀬長榮 ⑥70銭 ⑦32p 表紙共 ⑧K、表K1色

- 006 『東北文学』 ①A5 ②1月1日発行 ③月刊 ④河北新報社 ⑤三原良吉 ⑥1圓 ⑦96p
⑧K、表O3色
- 007 『中等教育』 ①A5 ②1月15日発行 ③月刊 ④中等学校教科書株式會社 ⑤波多野精
⑥80銭 ⑦32p ⑧K表紙共
- 008 『ニュース』 ①A4 ②1月20日 ③旬刊 ④東西出版社 ⑤築井健人 ⑥1圓50銭 ⑦32p
⑧MO、表O2色
- 009 『新風』 ①B5 ②1月28日発行 ③月刊 ④大阪新聞社東京支社 ⑤小暮健 ⑥1圓50銭
⑦48p ⑧K、表O4色
- 010 『生活と住居』 ①B5 ②2月号 ③月刊 ④誠文堂新光社 ⑤小川菊松 ⑥2圓50銭 ⑦
32p ⑧K、表K2色
- 011 『鶏苑』 ①A5 ②2月1日発行 ③月刊 ④鶏苑発行所 ⑤常見千香夫 ⑥2圓 ⑦64p
⑧K、表O4色
- 012 『評論』 ①A5 ②2月1日発行 ③月刊 ④河出書房 ⑤田邊典夫 ⑥3圓 ⑦128p ⑧
K、表O2色
- 013 『新人』 ①A5 ②2月1日発行 ③月刊 ④小学館 ⑤荒木巍 ⑥3圓 ⑦96p ⑧K、表
K2色
- 014 『文明』 ①A5 ②2月1日発行 ③月刊 ④文明社 ⑤田宮虎彦 ⑥3圓 ⑦96p ⑧K、
表O2色
- 015 『婦人朝日』 ①B5 ②2月1日発行 ③月刊 ④朝日新聞社 ⑤小倉敬二 ⑥1圓50銭
⑦58p ⑧K、MG8p、表O4色
- 016 『世界知識』 ①B5 ②2月1日発行 ③月刊 ④誠文堂新光社 ⑤小川菊松 ⑥2圓 ⑦
32p ⑧K、表O2色
- 017 『アメリカ百科』 ①B5 ②3月1日発行 ③月刊 ④研進社 ⑤上西利親 ⑥3圓 ⑦40p
⑧K、表O2色
- 018 『家庭と農園』 ①A5 ②3月1日発行 ③月刊 ④家庭と農園社 ⑤上田嘉信 ⑥1圓50
銭 ⑦32p ⑧K、表K2色
- 019 『婦人春秋』 ①B5 ②3月1日発行 ③月刊 ④政経春秋社 ⑤神崎孝治 ⑥3圓 ⑦46p
⑧K、口絵O2色4p、MG4p、表O2色
- 020 『科学の世界』 ①B5 ②3月1日発行 ③月刊 ④高山書院 ⑤駒田彌太郎 ⑥2圓80銭
⑦40p ⑧K、表O2色
- 021 『農耕と園藝』 ①B5 ②2月号 ③月刊 ④誠文堂新光社 ⑤石井勇義 ⑥2圓 ⑦32p
⑧K、表K2色
- 022 『新日本文学』 ①A5 ②3月1日発行 ③月刊 ④新日本文学会 ⑤藏原惟人 ⑥3圓
⑦88p ⑧K、表O2色

創刊号70冊に見る昭和21年の出版状況（田中 薫）

- 023 『随筆人』 ①B5 ②3月1日発行 ③月刊 ④文華協會 ⑤川崎文治 ⑥1圓 ⑦20p ⑧
K1色表紙共
- 024 『ニウ・ワールド』 ①A5 ②3月1日発行 ③月刊 ④亜細亜社出版部 ⑤河野善博 ⑥
2圓 ⑦48p ⑧K、表O4色
- 025 『子供の教養』 ①A5 ②3月1日発行 ③月刊 ④子供の教養社 ⑤高崎能樹 ⑥50銭
⑦32p ⑧K、表K2色
- 026 『スタイル』 ①B5 ②3月1日発行 ③月刊 ④スタイル社 ⑤北原武夫 ⑥3圓50銭
⑦58p ⑧K、MG8p、表O4色
- 027 『藝林間歩』 ①A5 ②4月1日発行 ③月刊 ④東京出版 ⑤野田宇太郎 ⑥4圓50銭
⑦96p ⑧K、表O2色
- 028 『赤とんぼ』 ①A5 ②4月1日発行 ③月刊 ④実業之日本社 ⑤藤田圭雄 ⑥2圓50銭
⑦48p ⑧K、表O4色
- 029 『世紀』 ①A5 ②4月1日発行 ③月刊 ④千染堂 ⑤土田隆 ⑥4圓 ⑦88p ⑧K、表
K2色
- 030 『世界の動き』 ①B5 ②4月1日発行 ③月2回刊 ④毎日新聞社 ⑤相馬基 ⑥2圓 ⑦
36p ⑧K、表K2色
- 031 『新婦人』 ①B5 ②4月1日発行 ③月刊 ④能加美出版株式会社 ⑤梅野彪 ⑥3圓50
銭 ⑦76p ⑧K、表K4色、口絵O2色8p+4色MG2p
- 032 『東西』 ①A5 ②4月1日発行 ③月刊 ④弘文社 ⑤牧野弘之 ⑥3圓50銭 ⑦96p ⑧
K、表K2色
- 033 『黄蜂』 ①A5 ②4月10日発行 ③月刊 ④黄蜂社 ⑤寺田俊雄 ⑥5圓 ⑦128p ⑧K、
表O2色
- 034 『世界文學』 ①A5 ②4月15日発行 ③月刊 ④世界文學社 ⑤柴野方彦 ⑥4圓 ⑦90p
⑧K、表K2色
- 035 『饗宴』 ①A5 ②5月1日発行 ③月刊 ④日本書院 ⑤嘉門安雄 ⑥5圓 ⑦142p ⑧
K、表K2色
- 036 『晚鐘』 ①A5 ②5月1日 ③月刊 ④暁社 ⑤西田康三郎 ⑥4圓50銭 ⑦96p ⑧K、
表K2色
- 037 『太陽系』 ①168×243 ②5月1日 ③月刊 ④太陽系社 ⑤水谷勢二 ⑥2圓50銭 ⑦32p
⑧K、表K2色
- 038 『新樹』 ①A5 ②5月1日発行 ③月刊 ④三鷹書房出版部 ⑤富山文雄 ⑥3圓 ⑦48p
⑧K、表O4色
- 039 『牧野植物混混録』 ①A5 ②5月1日発行 ③月刊 ④鎌倉書房 ⑤長谷川映太郎 ⑥
1圓50銭 ⑦18p ⑧K、表K2色



昭和21年の雑誌創刊号



昭和21年の雑誌創刊号

創刊号70冊に見る昭和21年の出版状況（田中 薫）

- 040 『自然』 ①B5 ②5月1日発行 ③月刊 ④中央公論社 ⑤小倉眞美 ⑥4圓 ⑦32p ⑧K、MG16p、MG、表O3色、表紙デザイン＝原弘
- 041 『婦人文庫』 ①A5 ②5月1日発行 ③月刊 ④鎌倉文庫 ⑤岡澤一夫 ⑥4圓50銭 ⑦132p ⑧K、MG4p、表O4色
- 042 『不二』 ①A5 ②5月5日発行 ③月刊 ④不二出版社 ⑤藤井一郎 ⑥1圓 ⑦26p ⑧K、表K1色
- 043 『午前』 ①A5 ②6月1日発行 ③月刊 ④南風書房 ⑤北川晃二 ⑥4圓 ⑦104p ⑧K、表O2色
- 044 『スポーツ』 ①B5 ②6月1日発行 ③月刊 ④體育日本社 ⑤大谷要三 ⑥3圓 ⑦32p ⑧K、口絵K4p、表O3色
- 045 『自然科学』 ①A5 ②6月1日発行 ③月刊 ④民主主義科學者協會編輯 霞ヶ關書房 ⑤星野芳郎 ⑥4圓 ⑦32p ⑧K、表K2色
- 046 『女性改造』 ①A5 ②6月1日発行 ③月刊 ④改造社 ⑤山本俊太 ⑥4圓 ⑦96p ⑧K、表O4色
- 047 『中学上級』 ①B5 ②7月1日発行 ③月刊 ④研究社 ⑤小酒井益藏 ⑥2圓50銭 ⑦32p ⑧K、表紙共
- 048 『労働評論』 ①B5 ②7月1日発行 ③月刊 ④労働協會編輯・毎日新聞社発売 ⑤若松宗一郎 ⑥3圓50銭 ⑦64p ⑧K、表O2色
- 049 『新教育研究』 ①A5 ②7月15日発行 ③月刊 ④日本綜合教育研究所 ⑤加藤勝也 ⑥4圓 ⑦64p ⑧K、表K2色
- 050 『讀物クラブ』 ①B5 ②8月15日 ③月刊 ④新世紀社 ⑤一杉章 ⑥4圓 ⑦64p ⑧K、表O4色
- 051 『美術及工藝』 ①B5 ②8月15日発行 ③月刊 ④日本美術及工藝會 ⑤高村豊周 ⑥10圓 ⑦64p ⑧K、MG8p、口絵K4色1p、K1色4p
- 052 『應用気象』 ①B5 ②9月号 ③月刊 ④北方出版社 ⑤田澤博 ⑥8圓 ⑦70p ⑧K、表K2色
- 053 『藍』 ①A5 ②9月1日発行 ③月刊 ④藍香社 ⑤岡安明壽 ⑥5圓 ⑦64p ⑧K、表O2色
- 054 『現代俳句』 ①A5 ②9月5日発行 ③月刊 ④現代俳句社 ⑤石田哲大 ⑥3圓50銭 ⑦64p ⑧K、表K2色
- 055 『社會』 ①B5 ②9月20日発行 ③月刊 ④鎌倉文庫 ⑤清水立夫 ⑥5圓50銭 ⑦74p ⑧K、口絵MG8p、表O3色
- 056 『少年工作』 ①B6 ②10月1日発行 ③月刊 ④科学教材社 ⑤小川良雄 ⑥5圓 ⑦66p ⑧K、表O2色

- 057 『教育春秋』 ①B5 ②10月1日発行 ③月刊 ④教育春秋社 ⑤赤坂軍治 ⑥4圓 ⑦40p
⑧K、表O2色
- 058 『知慧』 ①A5 ②10月1日発行 ③月刊 ④秋田屋 ⑤八束清 ⑥6圓 ⑦128p ⑧K、
表O2色
- 059 『YOUNG』 ①B5 ②10月1日発行 ③月刊 ④東光社 ⑤内田武一郎 ⑥3圓50銭 ⑦
24p ⑧K、表K2色
- 060 『銀河』 ①A5 ②10月1日発行 ③月刊 ④新潮社 ⑤佐藤亮一 編集顧問・山本有三
⑥4圓 ⑦68p ⑧K、MG4p、表O4色
- 061 『少年讀賣』 ①B5 ②10月1日発行 ③月刊 ④読売新聞社 ⑤雨宮庸蔵 ⑥3圓50銭
⑦342p ⑧K、O2色4p、表O4色
- 062 『象徴』 ①B5 ②10月30日号 ③月刊 ④福村書店 ⑤結城信一 ⑥20圓 ⑦120p ⑧K、
表K2色
- 063 『MUSIC』 ①A5 ②11月1日発行 ③月刊 ④アポロ出版社 ⑤末正久左衛門 ⑥4圓50
銭 ⑦48p ⑧K、口絵K1色2p、表O2色
- 064 『自然研究』 ①B5 ②11月1日発行 ③月刊 ④光風館 ⑤古川晴男 ⑥6圓 ⑦48p ⑧
K、MG4p、表K2色
- 065 『科学圏』 ①A5 ②11月1日発行 ③月刊 ④青山書院 ⑤鶴殿正元 ⑥5圓 ⑦80p
⑧K、表O2色
- 066 『地球の科学』 ①A5 ②11月1日発行 ③月刊 ④目黒書店 ⑤岡田八郎 ⑥3圓 ⑦32p
⑧K、表K2色、口絵K1色2p
- 067 『アメリカ教育』 ①B5 ②12月1日発行 ③月刊 ④國民教育社 ⑤アメリカ教育研究会
⑥6圓70銭 ⑦48p ⑧K、表O2色
- 068 『探書マンスリー』 ①B6 ②12月1日発行 ③月刊 ④新府書房 ⑤田子秀雄 ⑥6圓
⑦112p ⑧K、表O3色
- 069 『書評』 ①A5 ②12月1日発行 ③月刊 ④日本出版協會 ⑤田所太郎 ⑥5圓 ⑦96p
⑧K、表K2色
- 070 『立教地學會會誌』 ①A5 ②1946年 ③不明 ④立教地學會 ⑤笹井克彦 ⑥— ⑦
70p ⑧ガリ版

以上の70冊である。⁽²⁾

これらの70冊の資料のうち、最後の070の『立教地學會會誌』はガリ版刷りの刊行物であり、立教大学の1サークルが発行した校内誌なので、厳密な意味ではここに加える資料としてはふさわしくない。

また、総じてこれらのコレクションは内容的には、きわめてバラエティに富んでいると言える

のだが、この時代にはすでに話題となり始めていたカストリ雑誌や少年少女誌などがほとんど含まれていないので、コレクション及び分析対象として考えた場合の研究資料としては、偏りがあることは否めない。

Ⅲ 70冊の資料を分析する

このように資料としては、偏りがあることは承知しているものの、とりあえず内容の検討を試みてみることにしたい。そこで、次の凡例でも示しているように、次のような10の項目別に、これらの70冊の資料を分析してみた結果を示してみよう。

『新版出版データブック』⁽³⁾によれば、この年の雑誌の総発行点数は2,924点であったとされる。しかし、そのうちに創刊号が何点あったかについては残念ながら記されていない。しかも、それ以上の細かい数字に関しても記載されていない。

ちなみに同じこの年、1946（昭和21）年の書籍の総発行点数は3,470点であった。昨年（2001年度）の数字が約7万点であることと比較すると、かなり少ない。そして『新版出版データブック』には次のような記述がある。

「用紙不況の深刻なかでも出版社の創立があいついだこともこの年の特徴である。20年末に出版協会会員566社が、この年末には2,459社になっていた。出せば売れる時代を示しているといえよう。」⁽⁴⁾

などとある。が、いずれにせよ終戦時に活動していた出版会社数は、わずかに300社程度であったにすぎないという。

●70冊の創刊号の分析結果

それでは、凡例に示した8つの項目以外に、紙質と印刷についても、その実物から受ける印象等を加えて、次のような10項目についての分析結果を述べてみよう。

1. 判型（サイズ）：判型はB5判が28点とA4判が34点であり、この2つの大きさのものが圧倒的に多い。が、中にはB6判という小さなサイズのものも5点ある。一方、A4判はわずかに1点である。また『太陽系』という俳句雑誌は168×243ミリという寸法だが、A判、B判の標準寸法にはあてはまらない。しかし、極端な紙不足という時代の状況の中であっても「とにかく、何か出そう」という強い意気込みが、どの雑誌からも感じられる。
2. 第1巻第1号の日付の標記：表紙には通常、月号の表記が記載されているものだが、この時代はまだ「○月号」という形で入れるというルールが確立していなかったようである。したがって「○月号」という言葉の表記もなく、唐突に月の数字を入れたものが、いくつか見られる程度。また、そのどちらもなく、ただ「創刊號」とのみ表紙に記してあるものも多い。
3. 発行形態：発行サイクルには月刊、週刊、旬刊とそれぞれあるが、最も多いのは月刊の65点

であり、全体の95%を占めている。それ以外では旬刊と月2回刊が各1点である。また、週刊誌はこの年の資料のなかにはまだ入っていない。『週刊新潮』の創刊によって、出版社系の「週刊誌の時代」が来るのはまだずっと後、1956(昭和31)年のことである。

4. 版元名：出版社の名前はさまざまであり、現在でも健在である大手有名出版社の手によるものも多々あるが、消えてしまった社名も多い。また、社名は変わったが今でも存続している社については、追跡できていない。
5. 編集人または編集長名：当時、あるいはその後有名人となった人たちの名前が散見されるが、その詳細は省く。いずれにせよ、すべてのものに明確な固有名詞が記載されている。また発行人も書かれているが、このリストでは割愛した。
6. 定価：単位は〈銭〉がまだ生きている。が、定価そのものは千差万別。60銭の『宗教と文化』(B5判、16p)が最も安く、1圓、3圓、5圓、6圓など。『象徴』(B5判、120p)という美術雑誌は何と20圓である。また〈円〉という文字ははまだ使われていない。旧字である〈圓〉が使われているものばかり。しかしインフレの最中であり、定価はどんどん変わっていったようである。

当用漢字1,850字、新かなづかいなどが決定されるのは、1946(昭和21)年11月のこと。また当用漢字音訓表、当用漢字別表が公表されるのは、1948(昭和23)年2月のことだから、〈円〉の字が常識となるのは、それ以後のことといえる。

7. 総頁数：総頁数はさまざまだが、総じて1冊のボリュームは薄いものが多い。16頁、64頁、96頁、128頁など、台割りの単位の整数倍のものが圧倒的に多い。
8. 版式：Kは活版。Oはオフセット印刷、Gはグラビア印刷であることを示しているが、活版によるものが圧倒的に多い。オフセット印刷もグラビア印刷も一部には使われているが、今日のレベルと比較すると、考えられないくらい品質は悪い。表紙はオフセット4色刷りによるものも一部には見られるが、一方、活版の共刷りによるものも多く、特に今日のような別の少し厚い特別な表紙用紙を使っていないものも多く見受けられる。

とにかく、造本上の作りはどれもこれも、今日目から見れば、総じて粗末である。また、複数の版式を組み合わせたものも多々見受けられるが、ビジュアルな頁は数頁しか入っていないものが多く、口絵の域を出ない。

9. 紙質：うすいワラ半紙が多い。仙貨(花)紙を使っているものもある。とにかく用紙事情が悪かったのはあきらかだが、その点については、別途、資料から調べた結果としてこの当時の状況については、あらためて引用等を用いて触れることにする。
10. 印刷：印刷の質は今日と比べればよくない。鮮明度は悪い。その点に関しても、あらためて別個に詳しく述べることにする。

そこで、次に誌名の特徴について、見てみることにしよう。

● 誌名の特徴

雑誌の名前（題号、タイトル）は、この年に創刊されたものは、それ以前の戦前のものとは大きく変わっている。戦前のものは『銃後の婦人』とか『少国民文化』『肇国精神』『海軍報道』など、いかにも軍国主義を感じさせるものが多かったが、戦後は一転して、『アメリカ百科』『世界知識』『ニウ・ワールド』『アメリカ教育』など、いかにも戦後らしい雰囲気を持ったタイトルのものが数多く見受けられる。

さらに小川菊松の『日本出版界の歩み』には、この年創刊された雑誌に、次のような誌名があったことが紹介されている。

「瓦礫の街には、表紙折り放しの新しい雑誌が続々と創刊された。「新日本」「新生」「光」「人民評論」「自由評論」「雄鶏通信」「民主評論」等が創刊され、「新潮」と「文芸」が11月に早くも復刊されている。21年に入ると「中央公論」と「改造」「文芸春秋」が復刊、「世界」「デモクラシー」「展望」「世界評論」「潮流」「人間」「自由評論」「社会評論」「新日本文学」「近代文学」「宝石」「主婦と生活」「私のきもの」「群像」「リーダーズ・ダイジェスト」「ロマンス」「それいゆ」「少年」「少女」等が創刊され、22年には「風雪」「ひまわり」「平凡」「野球少年」「ヨーロッパ」「地上」「文芸往来」「新文芸」「小説新潮」「ホーム」「ポピュラー・サイエンス日本語版」「ホーム」「婦人生活」「文学界」等が創刊されている。」⁽⁵⁾

またこの時、『幼年倶楽部』や『少年倶楽部』も復刊第1号が出版されたようである。そういえば私の頭の中には、この『幼年倶楽部』を、その頃、わが家が住んでいたハモニカ長屋のある高校の正門前にあった書店まで、貯金箱を壊して取り出したしわくちャの50銭と1円札を手にいっぱい握って、弟と雨の中を買いに行き、家に帰ってむさぼるように読んだという、その時の記憶が、今でも鮮明に残っている。

では次に、この時代はどのような状況にあったのかということと、なぜ、私の父がこのような創刊号を集めたのか、その理由及び集めた当時の状況について、ふれておくことにしたい。

Ⅳ 昭和21年はどのような時代であったのか

なぜ私の父（田中一）がこのように、この時期に創刊号をたくさん集めるようになったのか、何か動機があったのだろうか。きわめて私的なことだが、この点に関して、私が今春作成した目録を見て語ってくれた、妹の証言がある。

「どうして、お父さんが創刊号を集めるようになったか知ってる？」という彼女の質問に対しては、「知らなかった」と答えた私。そしたら、

「あのね、お父さんは自分の名前が一（かず と読む）だから、何でも一番が好きだったのよ。それで集めたの」というのである。妹は1992（平成4）年4月に80歳で亡くなった本人から、以前にそのような話を聞いたことがあるという。このように、集めた理由はきわめて個人的、かつ主

観的な動機であったにすぎない。

しかし実は、私にとっては、迂闊なことにこの話は初耳だった。が、この会話はそれなりに納得のいくものだった。そういえば、最も古いコレクションは1928(昭和3)年の『平凡』(平凡社)である。この当時、父は埼玉師範の学生だった。そして、平凡社の創立者下中彌三郎は、埼玉師範の教員だったことがあると聞いた。だから何か心理的なつながりがある、それがきっかけで入手したものかもしれない。それ以後も、散発的な創刊号のコレクションは続いている。

したがって戦前の1944(昭和19)年11月までのものが、のべ58冊もある。そのコレクションの数が一挙に集中的に増えるのが、昭和21年なのである。すでにもうその頃は、「創刊号を集めよう」という明確な意図を持っており、それを可能にする気分的な心の余裕ができていたのかもしれない。

そこでその当時、つまり昭和20年、21年の頃の私の記憶を記しておきたい。私は4人兄弟だがその時はまだこの妹と、もう一人の私の弟(三男)はいない。2人とも、団塊の世代の申し子だから、生まれるのはもう少し後なのだ。だからこのコレクションが形成された昭和21年には、まだ子供は長男である私と次男(弟)の2人だけだったのである。

父は1911(明治44)年10月、埼玉県入間市生まれ。当時は後に入間市に合併することになるよりはるかに前のことであり、入間郡元狭山村といていた。その父、私にとっての祖父は戦時中はその村の村長だった。

父は浦和にあった埼玉師範学校を出て、いくつかの学校を転勤したあと、戦時中は旧制浦和中学で地理の教師をしていた。そして34歳の時、終戦の年の1945(昭和20)年7月末になって、ようやく召集となり、八高線の箱根ヶ崎駅から近所の人たちの「歓呼の声」に送られて、日の丸の旗を背に出征して行った。

その時の光景を、母や祖父母たちと共に目撃していたことを何となく私は覚えている。その当時、私は4歳。だから、かなり記憶は不確かなのだが、それでもその前後のことで、今でも覚えていることは多い。

しかし、父が出征したのは、年齢的には一般の人と比べるとかなり遅い方だったと言えるだろう。理由はおそらく現役の教育者だったからではないかと考えられる。そして、応召した先は近衛兵だったと聞いている。

だから、戦火を交えていた戦場そのものには「行ったことはない」と聞いたが、あまり良い思い出はなかったようで、軍隊時代の話を語ってくれることはほとんどなかった。それでも「伊東から下田まで行軍してそれで終わりだった」といったことは後にはよく語っていた。

8月15日の終戦の日を迎えた後、8月末頃になって、入間の実家へ帰ってきた時には、軍隊で支給された飯盒をはじめ米や飴などのいろいろな分配品をたくさん持ちかえってきて、部屋いっぱいに広げていたのを覚えている。

しかし9月には早々に、単身で浦和へ戻り、元の中学の地理の教師として復職する。が、その

間、しばらくの間は、まだ母と私と弟の3人は疎開したまま。その入間市の父の実家で暮らしていた。

私たち3人が疎開したのはこの年の7月頃のことであり、その前は私は、4月からは埼玉女子師範学校の付属幼稚園の園児になっていて、5月には運動会をやった記憶がある。その後は、11月頃になってから、再び疎開先から引っ越しとなり家族4人でトラックの荷台に一切の家財道具をのせて、入間から浦和へ戻ることになる。

そうして、最初に入居した住居は校内の野球場の隅に建てられていた元兵舎(?)だった。その時、野球場はまだ全面的に掘り返されて耕されていて、芋畑のままだった。その後は、畑は作られなくなったが草茫々の光景が続き、しばらくはバッタの天国だった。

この宿舎は、当時はどこにでもよくあった完全なバラックで、中はただっ広い板間のまま。その一部に畳を敷いて、カーテンでかろうじて仕切って一軒分の居住スペースを確保していたにすぎなかったのだが、昭和21年になってからは大工さんが入り、職員住宅に改造され分離分割が行われて8軒の職員とその家族を収容する宿舎となりぎやかになった。

この長屋は4軒ずつ2棟、それが東西に一列にきれいに並んでいて、窓が8つあることから、悪童や近所の人たちからハモニカ長屋と揶揄された。その下の音のところがわが家であり、東側の一番はじっここの部屋だった。

このバラックは実は兵舎というより「浦和陸軍糧秣支廠」というのが正式名称だったようだ。浦中・浦高の歴史年表には「昭和19年8月25日、糧秣廠東京出張所本校校舎の一部を使用する」とあり、上級生たちが軍需工場に動員されてガランとなった空き校舎に、疎開してきた国の施設だったようなのである。そして、そこで働く人たちのために建てられたのが、この木造掘っ建て小屋の宿泊施設だったのだ。⁽⁶⁾

このように、もともと兵舎同様の小屋として建てられた建物だったのだが、本来の使命を終えて空き家になっていた。その後、住宅としての改造工事が続き、何回も大工さんが入って、改装がくりかえされ、だんだん人が住めるように、住宅らしく変化していったことを覚えている。

井戸も後から2本掘られたし、職人さんたちが掘る現場を実際に目撃もした。そして、後には水道水も使えるようになった。

しかし、それまではこの井戸から父や母がバケツで水を運んできてはカメ(瓶)に水をためておいて、杓で汲んで使っていた。その台所には素朴な板の流しがあり、飯は釜で、薪で炊いていた。また日用品は遠くの指定された店まで、ホコリの舞い上がる砂利道を、母と3人で乳母車を押して片道1時間ぐらいかけて配給品を取りに行っていた。今から思えば、考えられないほどの素朴な暮らしと住環境だったのである。

しかし、このような粗末な家に住んでいたのは、何もわが家だけだったわけではない。日本中がそうだったのだ。廃車になったバスや、貨車などに住んでいる家族はその頃の浦和市内には他にもあちこちにあり、昭和30年頃まではよく見かけたものだ。

給料は安いし、生活は苦しかったようだが、それにもかかわらず、こんな惨憺たる時代ではあったけれども、しかしおそらく父は、戦争も終わり復職もはたしてホッとしていた時期であり、案外希望に満ちていたのではなかったかと今は思える。また、そうした高揚した気分が背景にあったからこそ、その「何でも1番が好き」という理由で雑誌の創刊号を集中的に集めようという気になったのではないかと思われる。

実際、歴史年表にもあるようにこの年、1月に昭和天皇が神格否定を行い、人間宣言をしている。そして公職追放令が発令される。2月には第一次農地改革が実施され、日本農民組合が結成される。さらに緊急措置令で新円切り替え。食料緊急措置令公布。3月には憲法改正草案要綱が発表される。そして4月には男女平等の最初の総選挙が実施される。

5月にはメーデーが復活(第17回)し、極東軍事裁判(東京裁判)も開廷される。

また、9月には三井、三菱、住友、安田の4財閥解散が決定される。そして労働関係調整法公布(10月施行)。10月には第二次農地改革諸法(自作農創設特別措置法等)が公布される。さらに11月3日、日本国憲法公布(施行は翌年5月3日)となる。

そうした事象の詳細は、Ⅱ章の「時代の背景」の項でふれた通りである。父はすでに教員としての日々が始まっていたが、私は1年間、まだ、幼稚園にも小学校にも行かず、何となくこの長屋の周辺で過ごしていた。

だから小学1年生になるのは、翌1947(昭和22)年4月になってからのことである。しかもすでにふれたような社会的な事象については、殆ど自覚もなく、理解もできていなかった。

このようなわが家のプライベートな情景と、Ⅱ章でも紹介した歴史的な事実の展開とを重ねて対比的に見ると、当時の時代状況がいかに厳しく、ないない尽くしの状態であったかが、よく読み取れる。

V 70冊の創刊号から読み取れること

では、これらの創刊号が発行される前、戦時中の出版事情及び終戦時の出版状況に関して、どのような状況にあったかを、かいつまんで紹介し、その流れを述べておこう。終戦時の出版状況は、まさに潰滅的な状態であったと言ってよい。

再び先述した『新版出版データブック』によれば、1945(昭和20)年の終戦時には、雑誌は1,851点あったとされるが、書籍は658点だったにすぎない。しかし、創刊誌は41点あったようである。が、一方、休刊誌は74点あった。また復刊したものも多々あるが具体的な数字は示されていない。

残念ながら私のコレクションの中には当時、話題の中心であった新生社の雑誌が含まれていない。が、この当時の事情に関しては、田所太郎の『戦後出版の系譜』に次のような記述がある。

「終戦の年10月には、はやくも『文藝春秋』が復刊し、11月には『新生』が創刊された。高額原稿料で大家を動員するなど、さまざまな話題を呼び、作家の耳をそばだたせ、出版人を刺激するところのあった『新生』につづいて、翌21年1月には『改造』『中央公論』『日本評論』が復刊したほか、『世界』『潮流』『展望』が、2月には『世界評論』、3月には『朝日評論』、4月には『思索』などがそれぞれ創刊され、総合雑誌の黄金時代を迎えることになった。」⁽⁷⁾

また、新生社の雑誌に関しては、

「伝統あるほとんどの雑誌がその再興の見通しもたっていない昭和20年の9月10日、新橋駅からは目と鼻の、焼け崩れた瓦礫の街並のむこうに戦火をのがれて建っている大阪ビルディング（東京都麹町区内幸町）旧館6階の604号室の入口に“書肆新生社”の看板を掲げたのは、出版界ではまったく無名の青山虎之助という一文学青年であった。」⁽⁸⁾

と、福島鑄郎の『戦後雑誌の周辺』に書かれている。

また、この時代の状況について、尾崎秀樹、宗武朝子の『雑誌の時代』という書籍には、次のように書いてある。

「戦後すぐの段階を見ると、まだ名前の戻っていない『週刊毎日』の9月2日号が出て、それから、9月9日号、16日号の合併号につづく。この合併号になって、やっと新居格氏の「民主主義に就いて」などというのが出てくる。この段階では16ページでした。新聞大の紙を三つ折りにたたんで、ろくに断ち切りもしないで出したような形だった。表紙も共紙単色刷りでした。『サンデー毎日』に戻ったのは、昭和21年1月からで、1月6日号から表紙も色刷りになった。そのときは確か定価が20銭でしたが、その後インフレの影響もあって、1円に上がるのが21年9月、10円になるのが23年6月、百円になるのが47年12月といったぐあいに、急速に高くなっていく。と同時に、部数のほうも、戦後の混乱期をへて復興期へ向かう過程でふえていき、それに伴って受け手の層も広がっていくことになる。

戦後は、新聞の用紙割当制に縛られて各社とも苦勞しています。たとえば昭和22年の『週刊朝日』の例ですが、この段階で用紙割当委員会が割り当てている紙の部数がだいたい3万5千、ところが実際は3万5千どころかヤミ紙を使って11万部刷っている。これは扇谷正造氏の回想にもあるのでまちがいないと思います。当時は、活字でさえあればなんでも読む活字飢餓の状態でしたから、返品率は1万にも満たない、いわば戦後の活字待望の潮に乗ってグーッとものしていくんです。」⁽⁹⁾

などというように。このようにまさに日本中が活字に対して飢餓の状態だったのである。したがって出版界はまさに「出せば何でも売れる」状態であったようだ。

その頃の用紙統制に至る、戦時中のプロセスについては、布川角左衛門が『出版の諸相』の中で「戦時中の出版統制」として次のように書いている。

「『新聞雑誌用紙統制委員会』の承認による『出版用紙割当規程』に拠って、用紙の割当が

開始されたのは、16年6月21日からであった。」—中略—

「ついに第4回目の17年3月21日以降、それまでの「基準割当」を全廃し、「通常割当」をすべて「査定割当」に改めてしまった。そして、書籍はすべて発行承認制とし、個々の書籍に承認番号を与え、その番号を奥付に印刷しなければならないことにした。」—中略—

「書籍の出版はここですべて許可制となり、その一冊一冊についての用紙の割当権が、協会を通じて内閣情報局の「新聞雑誌用紙統制委員会」の掌中に収められた。」⁽¹⁰⁾

また小川菊松は、この辺の状況について、さらに次のように書いている。

「しかし全体的に見て戦時中の出版が、文部省の推薦図書や、時局的読物が中心であったことは当然の成行であった。

それも企業整備後は出版用紙も次第に枯渇し、昭和19年4月以降は不急のものは「一時中止」の命令が出されるという状態におちいり、20年に入ると数回にわたる東京空襲で出版の生産施設も殆どストップ状態になり、政府の統制強化と相俟って出版などはすでに潰滅状態が予想されるに至った。物資の欠乏、学徒動員、竹槍訓練、憲兵政治、国内は「非常時」からもはや「一億総玉砕で本土決戦」をの段階になってしまった。そうした混乱とかなしい狂奔のうちに8月を迎えたのであった。

戦時体制に入った出版界はたしかに暗い時代であり、混乱の時期であった。しかしそうした暗い時代にありながら悪条件とた、かいつ、前述のような出版活動が最後まで続けられたことはむしろ驚異であり、わが国に出版人の土性骨を示すものといっているのではあるまいか。」⁽¹¹⁾

などと結んでいる。こうした軍国主義的な雑誌が多数出版され、次第に混乱していった頃の状況は、櫻本富雄の『本が弾丸だったころ—戦時下の出版事情—』にくわしく書かれている。⁽¹²⁾

そうした壊滅的な状況からの復帰という希望に燃えて、資材不足ではありながら、出版人たちの努力は、大健闘という状況にあった。

「戦時体制から平和体制の切換え、先ず戦時中、出版内容の審査や用紙の配給権を握って出版界に君臨していた日本出版会が解散され（昭和20年10月10日）、出版自由化の第一歩がふみ出された。しかし出版会解散とともに代わって設立された日本出版協会（10月10日）は翌21年には用紙割当の原案作成という権限をもつことによって依然迫力を有し、いろいろな問題をひき起していった。」⁽¹³⁾

「長い言論出版の統制から解放され、出版企業は全く自由になったが、出版企業の根本をなす用紙も電力も石炭等の生産量も極めて乏しく、平常にはなかなか復さなかった。用紙の生産高を見ても、昭和16年の最盛時には、20億6千4百万ポンドであったが、終戦時の20年には、4万6千6百万ポンド。21年には3万6千5百万ポンドという状況であった。印刷面では戦前の2パーセントぐらいしか回復せず、製本能力などは、戦災のため殆んど20年9月頃は能力皆無という実状であった。一般産業界もまた同様で、生産は停滞し怠業状態であった。」⁽¹⁴⁾

などと続けている。そして、

「8月15日当時、雑誌は300誌前後に抑えられていた。統廃合をくり返し、用紙面はもちろん、出版・流通、享受の各面でしばられ、言論面でさらに二重、三重のくびきを課せられた出版界の状況は、悲惨そのものであったが、この重大な歴史の局面を記録しておかないと、すべては急速に失われてゆく。— 中略 —

昭和20年8月15日から、翌年4月30日までの8カ月間に創復刊された雑誌の数は434誌にのぼるといふ。」⁽¹⁵⁾

というような状況だった。そして、書店・流通事情に関しては次のような記述がある。

「書店なども全国でおよそ7,000軒が店を開き、都内だけを見ても昭和21年1月中旬までに100店が開店し、戦火で残った380店を加えると500店になんなんとしていた。雑誌の出版も激増の一途をたどり、8月15日から12月31日までの終戦直後に発行になった創復刊号だけでも170点にのぼっていた。」⁽¹⁶⁾

したがってこれらのことから、見方を変えればどの出版社にとっても戦争直後の状況は、これほど美味しい状態はなかった時期だったとってよいということが言えるだろう。まさに雨後の竹の子のように、その後、出版社が乱立される状況となってゆくのもなぜか納得できる。

こうした時代、戦後すぐの出版界のベストセラーに関する話題は『日米会話手帳』に関するものである。当事者の小川菊松自身が、「占領直後（昭和20）の9月15日に発行し、またたくまに360万部を売りつくしたことは空前でありまた絶後（？）のベスト・セラーであろう。」と自ら書いているように。⁽¹⁷⁾

この大ヒットを出した誠文堂新光社の小川は翌年になって、この『日米会話手帳』の利益を投入したらしく、2月に『生活と住居』『世界知識』『農耕と園藝』などという3冊の創刊号を立て続けに出版している。

今、見るとどれも作りは粗末だが、テーマはそれぞれタイムリーであり、その後、著名人となる学者たちが執筆陣となっている顔ぶれなどをみると、新しい時代に期待するその意気込みが強く感じられる。しかし、出版界以外の多くの産業もまたそうした状態だったようだが。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾

「今井田 22年の4月には、用紙割当の非常措置というものがとられて、原則として割当以外の用紙の使用が禁止になり、新規雑誌、長期継続出版の割当が中止になりました。

三枝 そんなに割当がきびしかったのに、あの頃新しい雑誌がたくさん出たでしょう。21年と22年だけでも相当数の雑誌が創刊されていますね。

今井田 ですからそういう雑誌はみんな仙花紙ですよ。当時の雑誌はほとんど仙花紙雑誌です。仙花紙がつくられたのは主に四国方面です。それと静岡県の吉原市です。

三枝 でも、表紙などは仙花紙ではダメなわけですからね。」⁽²⁰⁾

などという記述も見られる。

こうした昭和21年という時代に出された「雑誌の特徴は、どのようであったか」という点につ

いては、すでに紹介した、実際に実物を見て分析した「70冊の分析結果」の項を参照していただきたい。

ここで項目としてあげているのは「1. 判型、2. 第1巻第1号の日付の表記、3. 発行形態、4. 版元名、5. 編集人または編集長名、6. 定価、7. 総頁数、8. 版式、9. 紙質、10. 印刷」など、10の項目についてである。

これらに関してはそれぞれの項目にわたって、70冊の資料分析を行った項ですすでに示したが、このように、この時代の雑誌は、その後の時代のものと比べてみると、広告の本数がきわめて少ないことが特徴だといえるだろう。

しかも、薬の広告がきわめて多い。このように薬品業界が、この当時のスポンサーたりうる主要なメーカーだったのだということがこの事例から読み取れる。これらの広告から見る限り、この時代、薬業界はかなり景気がよかったのではないかということが推測できる。

一方、後に主役となる家電の広告はまだ殆どなく、『労働評論』という雑誌創刊号の表4に日立製作所が出した全面広告でさえもテーマは電球であった。

この事実は、当時の電力事情の悪さを個人的に思い出すことにつながる。当時は、電気の需要は、一般家庭では、裸電球による照明がいくつかと、せいぜいニクロム線を使った電熱器があったていどだった。だが、それも停電は日常茶飯事であり、照明さえも満足ではなく、停電の間は食卓を囲んで石油ランプや、ロウソクの光ですごした日々もたくさんあった事を思い出す。

もう一つ、この時代の雑誌全体を貫くムードとして、注目すべき点は本文の組み方がおもしろいことである。縦組みのものも、横組みのものも、どちらも自在に存在している。しかも、自然科学系はもちろん、それ以外のものであっても横組みのものが案外多い。その理由は欧文を意識したことからきているのではないかと考えられる。そして、何か新機軸を生み出そうとする意気込みが強く感じられる。

その本文の組み方については、新潮社から発行された雑誌で山本有三が編集顧問としてたずさわっている少年少女誌『銀河』の創刊号に、次のような宣言文が掲載されていて、興味深いので引用して紹介しておこう。

「コノ雑誌ノアケ方ガ、今マデノ雑誌ト逆ニナツテキルノデ、皆サンハチヨット、メンクラッタコトデセウ。シカシ、スグ「ア、コレハ算數ヤ理科ノ教科書ト同ジアケ方ナノダナ。」ト、気ヅカレタにチガヒアリマセン。

ナゼ、カウイフアケ方ヲスルヤウニナツタカトイフト、イフマデモナク、ナカノ活字ガ、全部ヒダリ横グミにナツテキルカラデス。今マデノ雑誌ノヤウニ、ドウシテ、タテ組ミニシナイデ、横グミニシタノデセウ。ソレハ第一ニハ、皆サンノ目ノコトヲ考ヘタカラデス。人間ノ目ハ、ダレノ目デモ、ミンナ横ニツイテキマス。デスカラ、タテニ組ンデアル活字ヨリモ、横ニ組ンデアルモノノハウガ、ズット讀ミヨイ道理デス。イヤ、ソレバカリデハアリマセン。目ノ玉ヲ上下左右ニ動カス筋肉ハ、上下に動カスヨリモ、左右に動カスハウガ、ラク

ナヤウニデキテキルノデス。シカモ左カラ右ヘ動カスノガ動カシイ、ノデス。サウイフ原理カラ、進ンダ國ノコトバハ、イヅレモ、ヒダリ横ガキニナツテキマス。ソコデ、コノ雑誌デモ思ヒキッテ、ヒダリ横グミニシタノデス。コレハタダ外国ノマネヲシタノデハアリマセン。タダシイ學理ニ従ツテ、タダシイ行き方ヲシヨウトシタマデデス。

今マデ、タテ書キニシテキタモノヲ、横ニ組ムコトハ、昔カラノシキタリニソムクコトデスガ、シキタリヨリモ、學理ノハウガ重ンズベキモノナラバ、ソレニ従フノガ、ワレワレノ、コレカラノ生き方デナケレバナリマセン。

皆サンハ、ステニ理科ノ教科書ナドデ、カウイフ組ミ方ニナレテキルノデスカラ、少シモ讀ミニクイ氣ヅカヒハナイト信ジマス。アナタ方ハ、新シイ日本ヲキヅキアゲテユク方デス。アナタ方ハ進歩的デナクテハイケマセン。アナタ方ハ、學理を尊ブ人デナクテハナリマセン。サウ思ッテ、コノ雑誌ハカウイフ組ミ方ニシタノデス。』⁽²¹⁾

この宣言文の中からもまた、出版人たちの新時代への意気込みを読みとることができる。例えば、「新しい日本を築きあげて行く方」とか、「進歩的でなくてははいけません」「學理を尊ぶ人」などという表現の中に、その決意のほどが如実にあらわれている。

一方、資材不足が顕著であったことはあきらかであり、表紙の印刷もせいぜい2色刷り程度のものが多く、本文と共紙であり、後の時代の雑誌の定石のように別紙によるものがついていない裸同然のものも多い。が、その裏には機材の未発達や産業の振興の潰滅的状况という事情があったからであり、まだ工場も稼働せず、原料も手に入らないというせっぱつまった事情があったということが容易に推測できる。

Ⅵ わかったこと

21世紀も2年目に入った2002（平成14）年の現在の出版界の状況と比べてみると、この60年前の時代のものはまだすべての事柄が、とにかく比較にならないくらいお粗末だったということに尽きる。たしかに、国情そのものが悲惨な状況におかれており、大戦争に国をあげて参加したことによる物的な被害は甚大だった。

しかも、戦災という直接的な都市破壊を受けたことによるダメージだけでなく、多くの人々の心の荒廃もまた、すさまじいものがあったといえるだろう。

それだけに、それ以降の戦後復興のすさまじさ、激しさには目をみはるものがある。また、あれから約60年に及ぶ歳月がもたらした、多くの人々の英知の結集による技術の進化、質の向上にもとにかく目ざましいものがある。

そこで、少なくとも雑誌創刊号という資料に関して、60年前と現在とを比較して、わかったこと、及び確認できること。さらに、この60年間に变化したことは、次の4点である。

1. 印刷技術の著しい変化と進化

2. 造本、その他の技術の質的向上と量的拡大
3. 紙の品質の質的向上と種類(銘柄)の著しい増加、多様化
4. 雑誌の使命ともいうべき内容の著しい変化

などである。

とはいえ、この結論ではあまりにも単純すぎる。これでは別に調査しなくても、始めからわかっていることばかりと言われても仕方がない。

しかし、これらの資料から読み取れるようなあきらかな進化発展を、どのように評価するかということに関しては、また別の角度からチェックし、資料として生かすことが、必要なのではないか。

例えば、この時代の状況を、指標を1として計算すれば、今は何倍に変化したと言えるのだろうか。指標となるべきものは、いくつも考えられるが、とりあえず単純に60年前の物価を調べてみると、次のようになる。

『戦後値段史年表』という書籍によれば、昭和21年の物価は、「あんみつ」5円、映画館入場料4円50銭(5月)、駅弁(幕の内弁当)2円、鉛筆1本50銭、鶏卵15円20銭、公務員の初任給540円。週刊誌1円、しる粉5円、たばこ7円(ピース10本入り)、地下鉄乗車賃30銭、電球1個7円65銭、電報料金(10字以内)1円50銭などという数字がでていいる。これらの物の値段を現在のそれと比較してみると約100倍~250倍ぐらいに、金額は上がっているということになるのではないだろうか。但し、それがそのまま経済成長の度合いを示しているとは、そう単純にはいえないが、とにかく60年間の物価の変化には目ざましいものがある。⁽²²⁾

それと平行して、その間の技術的な面での進化は目ざましい。そして経済成長はバブルのピーク時を経て今は、陰りは著しいものますます多様化が進行している。メディアの世界も同様である。しかも、ますます情報の絶対量は増え続けており、むしろ「情報の拡散の時代」となっているかのような、状況を呈している時代となっている。

今は、デジタル・メディアの時代である。したがって、すでに一部には本の形が今までの紙と印刷・製本によるものとは大きく変わってしまっており、CD-ROMによるようなものも本の一環として発行されている。情報の量の増え方もさることながら、伝達方法自体が激しく、著しく変化しているのである。

またメディアの多様化だけでなく、デジタル・メディア中心の世界への移行が叫ばれている。しかし、そうしたとどまるところを知らない技術的な進化や変化が続くことによって、その技術革新がはたしてこれからも本当に、人類にとって、今まで以上の幸福をもたらしてくれることになるのだろうか。本質的な疑問が消えない。

むしろ現代は、あまりにも技術的な側面だけが突出して、進化しすぎてしまったと言えるのではないだろうか。

この時代、昭和21年前後の出版物の仕様及び内容と現在のそれをとを比べてみると、現代の方

が良いと言えるのは、情報の量の多さもさることながら、顕著な差異は紙と印刷のレベルの向上だけ、つまり技術の進化にもとづく仕様の面だけではないかと思えてくる。

現代の雑誌は、確かにどれ1つをとっても内容の多様性という意味では、昔のものよりは優れている。しかしその反面、これらの60年前のものとは比べてみると、どれもこれほどの厚さは本当に必要なのだろうかと思えてくる。むしろ1冊ずつのポリウムはもっと少なくても良いのではないだろうか。

今日の多くの出版物が目指しているような、量的な拡大のみを重視し、出版物の厚さ、つまり束（つか）を重視する傾向の強い価値観は好ましくない。もちろん、その背景にはそれを可能にしてきたスポンサー（広告主）の存在があったことは承知しているが。

しかし、これからはもっと情報をセレクトし、セーブして、シンプルな作りにした方が、時代のニーズにあっているということになるのではないか。それには日常の生活自体のシンプル化が必要なことは言うまでもないが。

守られるべき「言論・出版・表現の自由」という基本的な条件の中で、内容の安易な規制をすることは好ましくないが、1冊の雑誌の頁そのものは、もっと薄くてよいといえるのではないだろうか。とにかく、今日の雑誌の多くは重くて厚いものが多い。白土を用いて紙質を高め、カラー印刷の効果を高める工夫を重ねてきた結果だが、そうした努力ももう限界にきたと言えるのではないだろうか。

Ⅶ おわりに

21世紀を迎えて、2001（平成13）年9月11日、ニューヨークで衝撃的な事件が起きた。世界貿易センタービルに2機の航空機が激突、攻撃されてあえなく崩壊し、3,250人に及ぶ人々が亡くなった同時多発テロの発生である。その後、アメリカのブッシュ大統領がアフガニスタンで、アルカイダの討伐作戦を試みたが、首謀者とされるオサマ・ビンラディンは依然として行方不明のままであり、今だにつかまっていない。

一方、ソ連でも自決と分離への願望からロシアと対立しているチェチェン紛争にからみ、2002（平成14）年10月、武装勢力がモスクワの劇場を占拠するという事件が起きた。しかも、その鎮圧のために使用された、特殊ガスによって人質100人以上が殺されるという悲劇的な結果になった。さらにその少し前、インドネシアのバリ島で起きたテロ事件もまた、アルカイダの犯行ではないかといわれている。

これらの事象から読み取れることは、世界の中心となってきたヨーロッパの人たちの考え方は、全く異なった価値観をもつグループが、この地球上にはまだまだ存在しているという事実である。また、その裏にあるのは、今まで、よかれと思って展開してきた、アメリカ、ヨーロッパを中心として築きあげられてきた資本主義的価値観が、必ずしも「絶対ではない」ということの

叫びともいえる訴えではないかと考えられることである。

だから、これらの事件そのものが発信しているメッセージはアメリカ、ヨーロッパ中心に回転している世界の一本化に対する反旗なのであり、その裏にある私たちが是としてきた、また21世紀には是とされてきた「宗教と文化に対する拒否反応」が見えかくれしているといえるのではないだろうか。1990年7月、エリツインがロシア共和国の初代大統領に就任して、ソ連邦が崩壊したことがそうであったように。

したがって、今こそ必要なのは、あらためて各民族の固有の宗教や文化を見直し、それぞれのオリジナリティを大切にすることなのである。そしてそのための「価値観の転換」ということを訴えている、根強い既成概念への反対のアピールなのではないかと考えることができる。

もちろん、アルカイダやチェチェンの武装勢力がとったような、テロという手段はいかなる事情があるにせよ許されることではない。しかし、そのようにしてまでも発信しているその中身、メッセージには素直に耳を傾ける必要があるのではないだろうか。

メディアの世界で技術と種類が著しく豊かに発達をとげた今、それらのメディアを通じて伝達される素材は多い。しかし、今は受け手の側はそれらの豊富なニュースを、一方的に浴びているだけでなく、それらのなかから、暫時、自分なりに必要な情報を瞬時に受けとめて、選択しつつ対応することを迫られている時代でもある。

また、その選択の基準となるものは過去の価値観への反省であり、そうした意思が何より必要とされる時代なのである。そこには21世紀の資本中心に強者の論理によって回転してきた社会への反省が迫られている。

今やるべきことは、過去の負の面をあらためて、個々の一人ひとりが新しい本物の暮らしを取り戻すこと。そのためには、質の悪いものは淘汰していく論理を重視するべきなのだ。また、そのためには、今はもう世界的な規模で「減力」「減速」をキーワードとしなければ、地球環境が持たないという自覚を持つことなのである。

とすれば雑誌の紙質も形状も仕様も現状のままで良い。たしかに今、勢いのすさまじいデジタル・メディアによる進化が、かなり多くの人たちのにとって必要なのは事実である。しかし、それにふさわしいものについては推進すればよいのであって、すべてが一律に同じ品質を維持する必要はない。むしろ、棲み分けが大切なのではないだろうか。

「刺激」競争、「競争原理一辺倒」への反省。その原点の時代の原型ともいうべき、ある種の理想とも言える素朴な姿を、これらの70冊の雑誌の中から読み取ることができる。そうした意味では、これらの素朴な作りの雑誌群を見ていると、従来の価値観が追究してきた理念のように、経済力の評価を、いまでのように単純に前年比増の数値のみで、成長を是として評価するのは誤りではないかと思えてくる。

今、大切なことは「有限の地球資源をどう守っていくべきか」ということの、再確認なのである。したがって、そのポイントになるのは、地球の存続が「持続可能な開発」というコンセプト

を重視することではないだろうか。

ということから、安易な進歩発展に対してはむしろ「凍結」及び「原点回帰」という言葉を投げかけることこそ時代にとって必須のキーワードではないかと思えてくる。その背景に置き、守って行くべき理念は、「東洋的な物の見方考え方」といえるのではないだろうか。またそのことによって世界の枠組みを根本から変えていくような全く新しい視点による施策が必要なのだ。

そしてその原点の姿を忘れないために、あらためて昭和21年の雑誌から読み取れる時代状況を真摯に見つめ直す必要がある。そして、その中から日本及び世界が、20世紀後半部分で達成しえたような成果を、あらためて反省し、いまこそ次の時代の新たな主題のヒントをみつけだして行く必要があるといえるだろう。

また、人間の暮らしのあり方をストレートに証明しているこうした過去の「雑誌類は各時代の状況をありのままに伝える生きた資料」としての価値が高い。このような雑誌創刊号のコレクションとしては、すでに大宅文庫のものがあまりにも有名だが、それ以外にも、もっと国内の随所に残されていてよいのではないかと思う。

そこで最後に一つ、付け加えることがあるとすれば、これら資料を大宅文庫だけに頼るのではなく、県単位でせめて1館ぐらいいは、早急に整理保存し閲覧できる、専門的に特化した公的な施設としての雑誌資料保存館を設立することを提案したい。

注・参考引用文献

- (1) 『要説日本史年表』山川出版社、1981年、pp.40-42
- (2) 田中薫『宮崎公立大学716 田中薫研究室所蔵雑誌創刊号目録—創刊号に見る戦後日本の雑誌』書肆緑人館、2002年、pp.17-20
- (3)(4) 『新版出版データブック』2002年版、出版ニュース社、2002年、pp.6
- (5) 小川菊松『日本出版界の歩み』誠文堂新光社、1962年、pp.160
- (6) 埼玉県立浦和高等学校百年誌『銀杏樹—雄飛編』1995年、pp.126-128
- (7) 田所太郎『戦後出版の系譜』日本エディタースクール出版部、1976年、pp.7
- (8)(16) 福島鑄郎『戦後雑誌の周辺』筑摩書房、1987年、pp.38、pp.47
- (9) 尾崎秀樹、宗武朝子『雑誌の時代—その興亡のドラマ—』主婦の友社、1979年、pp.18-19
- (10) 布川角左衛門『出版の諸相』日本エディタースクール出版部、1975年。pp.116、pp.119
- (12) 櫻本富雄『本が弾丸だったころ—戦時下の出版事情—』青木書店、1996年
- (11)(13)(14) 小川菊松『日本出版界の歩み』誠文堂新光社、1962年、pp.154-155、pp.157-158
- (15) 福島鑄郎『戦後雑誌発掘』洋泉社、1985年、pp.9-10
- (17) 朝日新聞社編『「日米英会話手帳」はなぜ売れたか』朝日新聞社、1995年
- (18) 鈴木敏夫『出版—好不況下 興亡の一世紀』出版ニュース社、1970年、pp.242、256

- (19) 日本出版学会編『出版の検証 1945-1995敗戦から現在まで』文化通信社、1996年
- (20) 今井田勲、三枝佐枝子『婦人雑誌の世界—編集長から読者へ—』現代ジャーナリズム出版会、1976年、pp.99
- (21) 山本有三編集顧問『銀河』新潮社、1946年、表2より
- (22) 週刊朝日編『戦後物価史年表』朝日文庫、1995年



716研究室所蔵の昭和21年の雑誌創刊号